

第7回新炭素資源学国際シンポジウム 学生ディベートセッション報告

日時: 2011年6月24日

場所: 延世大学(韓国)

グローバルCOE「新炭素資源学」拠点 学生ディベートセッション企画・運営担当 増永 敬充

2011年6月23・24日、韓国の延世大学において、第7回新炭素資源学国際シンポジウムが行われ、その中で同大学の学生2名、九州大学筑紫地区のG-COE学生2名が企画・運営を担当して学生ディベートセッションを開催しました。

前回の九州大学筑紫キャンパスにて行われた第6回新炭素資源学国際シンポジウム(2010年11月12・13日)の中の学生ディベートセッションでは、「原子力発電について、先進国が発展途上国に技術提供し、発展途上国において原子力発電所を建設および普及することへの課題」をテーマとして行われました。経済、環境、安全性の3つの観点から議論された結果、CO₂発生が及ぼす地球温暖化問題は先進国だけではなく、発展途上国も取り組むべき課題であることを再認識できたとありますが、原子力の技術提供や普及が必要か否かの議論よりも、原子力発電が必要か否かに焦点が集まっていたと報告されています。

また、新炭素資源学において重要なCO₂排出削減に対して、原子力発電は発電時のCO₂排出量が非常に少なく、比較的安定的に電力を供給できるため、今後の世界各国の技術や人の生活を支える重要な電力供給法の一つであると考えられます。さらに、2011年3月11日の東日本大震災によって大きな被害を受けた福島第一原発の問題は、日本だけではなく世界各地で数多く取り上げられており、原発を有する国々において安全性強化が非常に重要な課題となっています。このように、福島原発の事故を受けて、世界各国では原子力発電の在り方について再び見直す議論が進められており、原発廃止をより確実にしていく国と国威をかけて維持を表明する国とに分かれています。このような議論が世界各国で活発化していることから、今回の学生ディベートセッションでは、「原子力発電に賛成か否か」というテーマを設定して、企画・運営に携わった学生の原子力発電に関する前説後に両大学の学生で賛成派・反対派に分かれてディベートを行いました。本ディベートでは、今後の世界の電力供給で重要な役割を担っている原子力発電の有効性や安全性などの知識を深めるとともに、国際社会で活躍するために必要な英語によるディベートおよびディスカッション能力の向上を目指します。

学生ディベートセッションは、本シンポジウムの最終イベントとして、約1時間半に渡り留



学生を含む九大生および延世大学の学生によって開催されました。まず、担当の延世大学の学生2名が原子力発電の原理、生成過程および安全性、G-COE学生2名が、本セッションの司会・進行を行うとともに、東日本大震災による福島第一原発事故について、あらかじめ作成した資料をもとにプレゼンテーションを行いました。その後、原子力発電におけるエネルギーと安全性というテーマに対して賛成および反対派に分かれ、議論を行いました。その結果、賛成派側からは、「原子力に匹敵する発電技術を開発することは難しいため、世界各国に数多く存在する原子力発電所やその使用率を制限する」「原子力発電が廃止されると、産業や経済社会、人々の暮らしに対して影響を及ぼすため、継続していくとともに代替エネルギーの使用率を最大限に伸ばす」「原子力発電は安全性に乏しいが、非常に効率的な発電技術で電力を安定して供給できることから、今回の原発事故の原因究明を徹底的に行い、安全性をより強化することができれば、今後も原子力発電を利用できる」などの意見が賛成派から述べられました。一方、否定派からは「突然の自然災害は予測が難しく、この被害を受けやすい原子力発電は危険性が高く、安全性が低いため廃止すべき」「世界の国々の中でも比較的安全性が高い日本で原発事故が起きて、結果的に核エネルギーをコントロールすることができな

いため、今後の原子力発電の継続は困難である」「放射能もれによる人体への健康被害は計り知れない」などの意見が否定派から述べられ、原子力の安全性に関する議論が中心となりました。今回の福島原発で起こった事故は「技術の過信」が生み出したもので、この事故の原因を明確に調査した上で、安全性の強化や改善に努めることができれば、継続は可能であるという賛成派に対し、自然災害の影響は予測が難しく、人命を最優先に考慮し、原発は廃止するべきだという反対派の意見が出され、様々な視点の中で議論が行われました。この中で、風力や太陽光発電などの再生可能エネルギーに関する意見も多く出され、今後の電力供給技術のあり方についても学ぶことができました。

前述したように2011年3月に起こった福島第一原発事故後のディベートであったことから、両学生は原発に対する様々な考え方や視点を持っており、この議論が活性化したことで、幅広い知見を持つことができ、今後の国際社会を担っていく研究者にとって非常に有意義な機会となりました。しかしながら、九州大学で意見を述べた学生のほとんどが留学生であったため、日本人学生は今後もこのような英語によるディベートセッションに積極的に参加し、相手の意見を尊重しながらグローバルな視点で自ら意見を述べることでディベート能力を向上させる必要があります。

